

第3章 積丹町の漁業

小原悠希

3.1 漁業

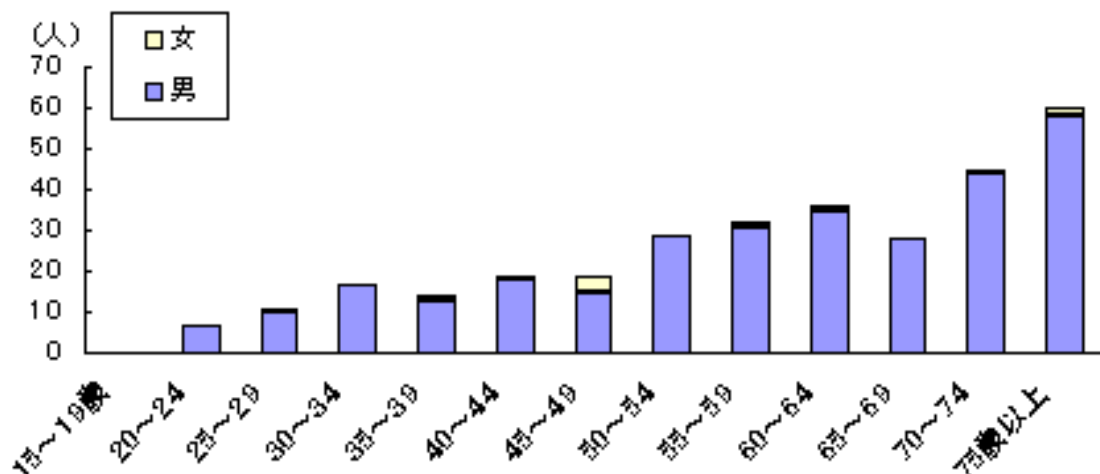
3.1.1 漁業就業者数・世帯数

積丹町で漁業を営んでいる世帯数は261世帯あり、個人漁業経営体は223世帯、漁業従事者世帯は38世帯である。漁業世帯数に占める個人漁業経営体数割合は85.4%と圧倒的なシェアを占めていることがわかる。漁業就業者数は、317人で、男性305人、女性12人と圧倒的に男性の割合が多い。ちなみに、女性12人はほぼ45～49歳代である。

次に、漁業世帯数・漁業就業者数の推移をみると、漁業就業者数は、93年～98年まで減少の一途をたどっていたが、98年～03年にかけて若干ではあるが、増加している。また、漁業世帯数は93年～03年まで減少し続けている。

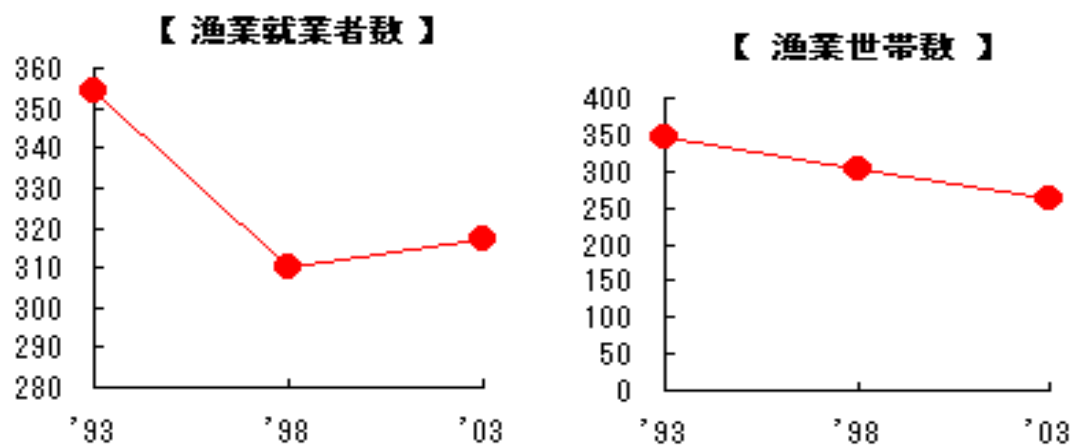
漁業就業者数が若干、回復傾向にあるとはいえ、図3.1のグラフからも分かるとおり、少子高齢化の影響もあってか、若者の労働者が少なく、年配の労働者が多数を占めている。第一次産業である漁業が、若者に人気がないのは既知の事実である。しかし、若者を育てて後継者を育成しなければ、漁業の衰退はもちろん、町自体がますます活力を失っていくと思われる。

図 3.1 性別・年齢別漁業就業者数



出典：(市町村の姿)北海道積丹町

図 3.2 漁業世帯数・就業者数の推移



出典：(市町村の姿)北海道積丹町

3.1.2 漁獲量漁獲高

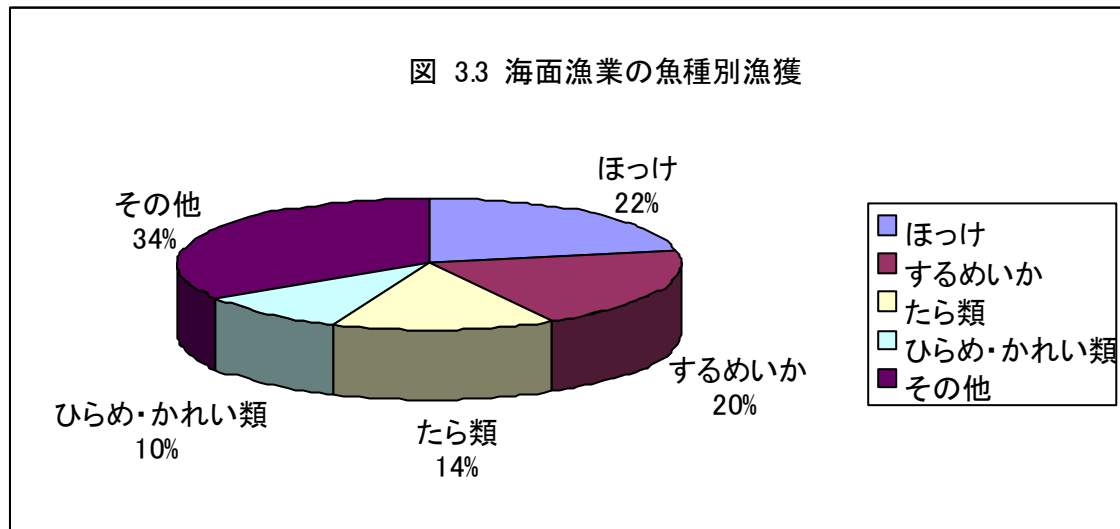
また、種類別の漁獲量漁獲高を表 3.1 及び図 3.3 に示す。漁獲量の 6 割以上が、ほっけ、するめいか、たら類である。また、にしんが 0 トンということから、今は、ほとんど、にしん漁が行われていないことがわかる。

表 3.1 海面漁業の魚種別漁獲量

合計	3298t	うち、上位20種類	
1 ほっけ	736t	11 まぐろ類	10t
2 するめいか	649t	12 なまこ類	5t
3 たら類	454t	13 こんぶ類	3t
4 ひらめ・かれい類	331t	14 さめ類	2t
5 いかなご	180t	15 あわび類	2t
6 うに類	134t	16 さば類	1t
7 ぶり類	124t	17 わかめ類	1t
8 さけ・ます類	98t	18 にしん	0t
9 えい類	72t	19 ふぐ類	0t
10 たこ類	71t		

出典：(市町村の姿)北海道積丹町

図 3.3 海面漁業の魚種別漁獲



出典：(市町村の姿)北海道積丹町

3.2 ウニについて

積丹半島で捕れるウニには、キタムラサキウニとエゾバフンウニの二種類がある。キタムラサキウニは、地元では通称「ノナ」と呼ばれ、トゲが長く黒っぽいウニで、身がクリーム色なので「白」とも呼ばれる。エゾバフンウニは、通称「ガンゼ」と呼ばれ、トゲは約1cmの饅頭型のウニで、身はオレンジ色なので「赤」とも呼ばれている。積丹半島では、9対1位でキタムラサキウニの収穫量が多いので、エゾバフンウニはどうしても値段が高くなる。

積丹町美国のウニ漁は6月~8月にかけて行われる。朝5時に合図とともに目指す漁場に一齐に出漁し、片足で器用に櫂を操りながら船を移動し、大きな箱めがねで海中を覗き込んで、ヤスで捕る（地域によってはタモで捕る漁協もある）。櫂をうまく操り、昆布の海の中にいる身入りのいいウニを見つけ捕るのはなかなか年季がいる作業である。

8~9時になると船着き場に戻り、カゴに入ったウニを「カラムキ小屋」へと運ぶ。「カラムキ小屋」には家族やバイトのおばさん達が待機し、一齐に殻ムキが始まる。殻から身を出す人、内臓などの不用物を取り除く人、折に詰める人。それぞれ手分けして手際よく作業を行っていく。箱詰めされたウニは、漁業組合で午後の入札にかけられ、その日の飛行機で、東京築地を中心とする本州の市場へ運ばれていく。積丹町美国のムラサキウニは築地でも一目置かれ、礼文のバフンウニと共に築地の二大ブランドである。

また、ウニも他の魚介類と同じで資源の枯渇が続いている。そこで、1983年に水産種苗センターが創られ、「育てる漁業」が行われている。美国町にある水産種苗センターでは一定期間（約8ヶ月）をかけ、海に放流できる15mmになるまで種苗を育成し放流する。今では、美国の水産種苗センターでは年間150万の種苗を生産している。今流行のいわゆる栽培漁業である。ウニは雑食性であるが、基本的には昆布を食べる。しかし、水産種苗セ

ンターでは、高たんばくうえ雑草のように生えるので、ただで手に入るイタドリに目を付け、ウニの育成に利用している。

ウニ漁の大きな問題としては、札幌を中心とする観光客の密漁と磯焼けがあげられる。又、漁に出られない日が続くこともあり、安定供給も大きな課題になっている。

3.3 ニシン漁の歴史

北海道の鯨漁業は 15 世紀半ばから始まるといわれているが、18 世紀後半から本州における鯨粕の需要の増加に伴って盛んになり、幕末には 15～20 万トンに達し、主要産業に発展した。その後、漁業制度の改革に伴う漁民の増加や漁網の改良によって漁獲高は急速に増加し、明治 30 年(1897)前後には年産 70～100 万トンの最盛期を迎えた。漁業総生産額の約 65～75%を鯨が占め、鯨の豊凶が北海道の経済に大きな影響を及ぼしていた。豊漁、凶漁を繰り返しながら、昭和 30 年には 5 万トンに激減して北海道の沿岸から姿を消した。漁場は初め道南地方に限られていたが、18 世紀初め頃には石狩地方にまで広がり、更に 19 世紀初め頃には日高・十勝地方を除く北海道のほぼ全域に及んだ。

3.3.1 鯨の用途

漁獲された鯨の主な用途は長い間、肥料であった。なかでも鯨粕が大部分を占め、ついで胴鯨、笹目、白子などであった。鯨漁業の最盛期には、肥料が全体の約 85%を占めていた。その後、大正末期から身欠鯨、鯨鯨（かずのこ）等の食料が次第に増加し、太平洋戦争中及び戦後の食料難の時代にいたって食料が肥料を上回るようになった。

3.3.2 江戸時代の鯨漁と松前藩の関係

松前藩の成立の基礎になったのは、秀吉からうけた朱印状、家康からうけた黒印状（慶長 9 年(1604)）だが、その内容として、

- (1) アイヌの人々の非分の厳禁を条件として、和人商船への関税、徴収権の保証
- (2) 松前での対アイヌ人交易の専有権の保証
- (3) 松前、蝦夷双方での交易専有権の保証

の 3 点があげられる。蠣崎氏（後の松前氏）の存在は国家的に保証され、松前藩が成立する。松前藩は無高であり、藩士の知行（俸禄）は石高で表すことはできないため、蝦夷地に商場を設けて交易の場とし（知行地）、これを藩士に分与した。藩士は城下で買い入れた本州産品を船積して、自身で商場に赴きアイヌの人々と交易し、入手したアイヌの人々の生産物を城下で商人に売って利潤を得て運営していた。

しかし、藩財政は構造的に行き詰まり、知行地の経営形態の改変を余儀なくされた。生

産が低下して収益の激減した「商場」の経営を商人に委ね、知行主はその代償として「運上金」を上納させ、定収入を確保しようとするものである。これを商場知行制という。

3.3.3 場所請負制

18 世紀に入ると、商場知行制によって利益を得た商人たちは、さらに利益を得ようと考え、一種の営業税である運上金を藩主に納めて交易や漁業経営を請負うようになった。これを場所請負制という。場所請負人は交易体制から離れて、商品（魚肥）の大量生産を目指す企業体制に転換して、アイヌ労働者を雇い入れた。それが減少すると、和人の出稼人や追鯨業者を受け入れて生産の拡大に努めた。

安永～享和年間(1772～1803) の鯨漁業の特徴として、

- (1) 福山、江差の凶漁によって、蝦夷地近場所(松前本領に近い熊石より先々の地で歌棄付近まで蝦夷地に出漁することを追鯨といい、漁夫は二八取りと呼ばれていた。) が追鯨漁場として解放されたこと。
- (2) 近場所も不漁に見舞われると、奥場所が拡張されたこと。
- (3) 搾粕の製造によって漁業は大いに発展したこと。

の 3 点があげられる。

3.3.4 明治の改正

明治 2 年(1869)開拓使が置かれ、場所請負制を廃止して漁場持と改め多年の旧習を洗除したとされている。

明治 9 年(1876)漁場持は廃止され漁場は解放、着業数は急激に増え、漁獲量も飛躍的に増加し、数年にしていわゆる百万石時代（75 万トン）にはいる。明治 30 年(1897)には 97 万 5 千トンという最高記録が残されている。

その後、漁況は、南部の漁場から次第に不規則になり、昭和 30 年(1958)を最後に鯨の時代は終わった。

3.4 ニシン漁の網

3.4.1 たも網から刺し網へ

和人が鯨漁を始めたのは、おおむね文安年間(1444～1448) のことであったといわれている。アイヌの人々は、初め、「たも網」を使用していた。そして、和人の増加につれて「刺し網」が普及し、福山・江差地方では漁期になると、浜に小屋掛して老若男女・貴賤貧富の区別なく従事して、自家の食料として蓄えるほか、これを加工し、本州に向けて販売して、利を得ていたと伝えられている。

3.4.2 大網現わる

元禄年間(1688～1703)までの鯨漁は松前本領内に限られ、蝦夷地への出漁は固く禁じられていた。享保年間(1716～1735)には禁も緩み、熊石の境を越えて蝦夷地へ出漁するものが現れ、西蝦夷地の、歌棄までの近場所の鯨漁が盛んになる。

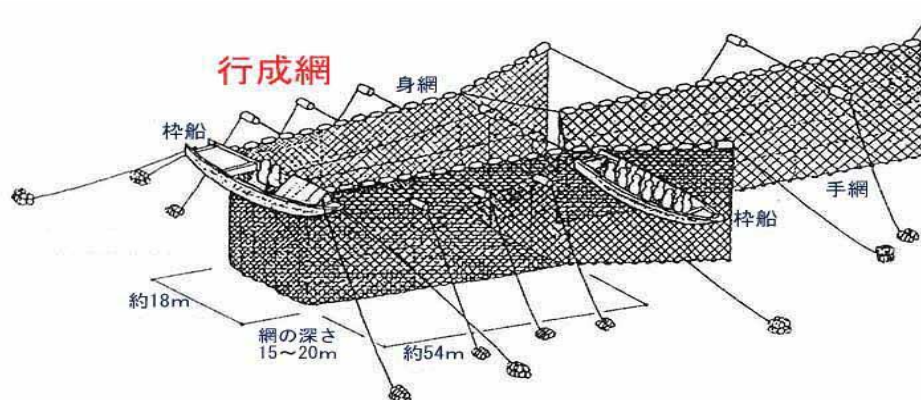
場所請負人は自ら漁夫を雇い、大規模な生産体制を整え始める。奥地では取締も緩く、奥地の場所請負人たちは、雑魚取りの名目で規模の大きな「ざる網」を使い、鯨締粕の製造を始めた。

「ざる網」はそれまでの刺網に比べ規模がはるかに大きかったので「大網」とよばれ、場所請負人だけでなく、「二八取り」と呼ばれた出稼ぎの漁夫達もこれを使うようになった。

3.4.3 行成網から角網へ

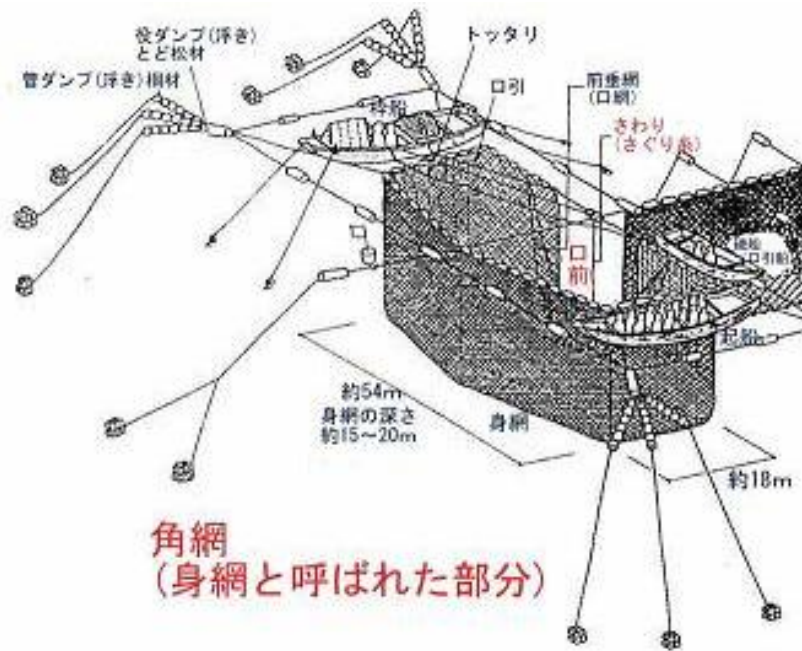
嘉永2年(1849)頃、歌棄の漁業者佐藤伊三衛門は「行成網」を工夫した。行成網(図3.4参照)は碇で固定され、しけの時に網をあげるのは同じだが、設置中は網起こし作業だけで、ざる網と違い袖網を操作する煩わしさがなく、労力は大いに省かれたので、以後明治末までの半世紀に亘って基幹的な漁具として使用された。そして、明治18年(1885)積丹の斉藤彦三郎は鯨角網(図3.5参照)を発明した。行成網では身網は浜の線と直角に据えられるので、桡船は常に横波を受け、左右の動揺が激しく、作業、特に夜泊りは苦勞になる。角網の場合は、桡船も起船も舟首を沖に向けるので横揺れは避けられ夜泊まりや作業は行成網よりもはるかに容易になった。角網は次第に全道に普及し、明治末期から大正初期にかけて、ことごとく角網に代っていった。

図 3.4 行成網



出典：鯨漁ホームページ

図 3.5 角網

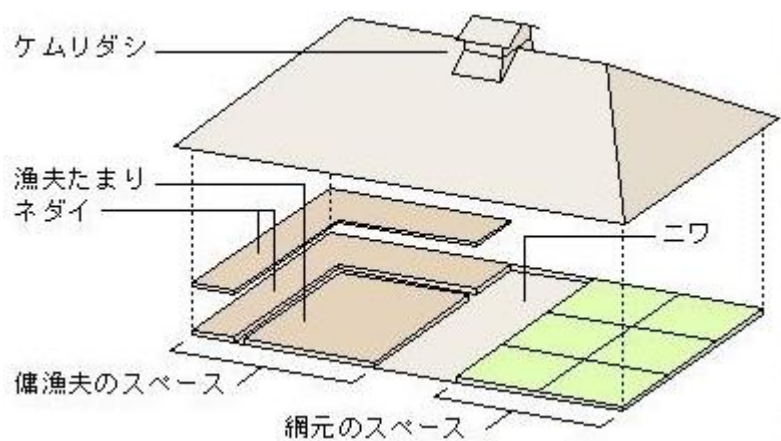


出典：鯧漁ホームページ

3.5 ニシン番屋

鯧番屋の内部構成について述べる。建物中央の玄関を入ると、正面にニワ（土間）が設けられ左右に空間を分割する（図 3.6 参照）。また、ケムリダシとは、小さい屋根のことで、外観を引き締める効果がある。ケムリダシには、入母屋型、切妻型、方形型がある（図 3.7 参照）。

図 3.6 番屋の見取り図



出典：日本の佇まいホームページ

図 3.7 ケムリダシ



入母屋型



切妻型



方形型

出典：日本の佇まいホームページ

分割された一方に、網元（漁場のオーナー）が普段生活するスペースが、そして他方にニシン漁が行われる時期に雇われる漁夫達のスペースが設置される。ちなみに、漁夫達は、ヤン衆と呼ばれて傭漁夫のスペースは、中央に共用スペースとしての漁夫だまりが大きく取られ、それを取り囲むようにL型ないしはコの字型にネダイ（寝台）と呼ばれる就寝スペースが設けられる。漁夫だまりは豪壮な小屋組を見せる吹抜け空間であり、ネダイは二層で構成される。この傭漁夫のスペースは通常「ダイドコロ」と呼ばれる。このように、ニワを挟んで網元用と傭漁夫用の異なる性格を持った空間が並置される構造が、番屋建築の特徴となっている。そして、その空間構成の特徴がそのまま外観に反映される。

次に、鯨漁屋建築物の現状について述べる。ニシンの漁獲高は1900年前後をピークに衰退の一途を辿り、30年代になると、漁場によっては事業を成立させにくい状況に至った。これに伴い、番屋を含む漁屋建築物は無用の長物と化し、戦時中に材木として抛出されたもの、道路整備に伴い除却されたもの、廃墟と化したもの、観光施設として転用されたもの等々、様々な運命を辿ることになった。また、1970年には包括的な緊急学術調査が実施されている。これにより、幾つかの漁家建築の遺構が保存されることになった。この時の調査内容は、「建造物緊急保存調査報告書第13集」として北海道教育委員会によりまとめられている。

参照 HP

積丹町役場ホームページ：<http://www.kanko-shakotan.jp/>

ようこそ積丹半島へ：<http://homepage3.nifty.com/shakotan/>

(市町村の姿)北海道積丹町：

<http://www.toukei.maff.go.jp/shityoson/map2/01-01/405/fisheries.html>

余市宇宙記念館ホームページ：<http://www.spacedome.co.jp/yoichi/bunka/nisin.html>

日本の佇まいホームページ：<http://www.k4.dion.ne.jp/~r231/nishin/info.html>

鯨漁ホームページ：

<http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/nr/nishinryo.html>